

国際交流事後活動ニュース

MACRO COSM

◎特集 第23回東南アジア青年の船

●速報 総務庁青少年国際交流事業参加青年募集

マクロコズム '97.3



vol. 15

(財)青少年国際交流推進センター

第23回東南アジア青年の船

1996. 9. 27 ~ 11. 26



▲ 出航式にあたり、激励の挨拶をする
日本青年国際交流機構大森会長



出航式で花束を受ける笹島管理官、渡辺船長
▼ 各国のナショナルリーダー（9月27日）

「東南アジア青年の船」は、昭和49年（1974年）の日本とアセアン5か国との共同声明に基づいて始められた事業です。昭和60年（1985年）の第12回からはブルネイ・ダルサラームが加わり、第23回には、ヴィエトナムがアセアン加盟に伴って正式参加国として加わりました。

「第23回東南アジア青年の船」は、東南アジア7か国（ブルネイ・ダルサラーム、インドネシア、

マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイ、ヴィエトナム）の青年307名と日本の青年45名、計352名が約2か月にわたって船内で生活を共にしながら、参加国を訪問しました。

船内では、ディスカッション、各国事情の紹介、スポーツ、クラブ活動などを行い、訪問国では、その国の青年との交流、ホームステイ、施設見学、ボランティア活動などを行いました。

様々な活動は、8か国が混合のソリダリティ・グループが基本。船内でのミーティングの一場面



▶ ヴィエトナムのナショナル・デーより



▲ ヴィエトナム（ホーチミン市）へ入港。いつものように、寄港地に着く朝は国旗掲揚で始まる



▲ ヴィエトナム参加青年、胸を張って感激の上陸



◀ ド・ムオイ書記長に表敬訪問（ハノイ市）
中央にド・ムオイ書記長と党幹部、向かって左側に笹島管理官と
各国ナショナルリーダーなど、右側に日本及びアセアン各国大使

ヴィエトナムの寄港地活動

(11月3日～6日)



◀ ホーチミン市の第5地区チルドレン・カルチャー・ハウス。日本の児童館と青少年会館を併せたような施設で、3歳から15歳までの子供たちが対象で、様々な社会教育を受けることができる ▶





▲ カーナルト製缶工場の見学（ホーチミン市）

ベトナム戦争の激戦地であった「クチ」での記念植樹。
▼ 永久なる平和を願って



◀ 軍事博物館の戦闘機の前にて
戦争を知らない世代こそが平和
を守る担い手に



◀ 出航式で参加青年代表の感謝のスピーチをするフィリピンのユース・
リーダー。いよいよアセアン最後の寄港地、フィリピンへ出発

▼ See you again!



人間関係の文化差 (最終回)

国際日本文化研究センター所長
京都大学名誉教授

河合 隼 雄

宗教と自然科学

そういう意味で、私が人間関係のこととしてお話ししたことは、宗教と深く関わっています。先ほど私がA型と言いました個人を大切にすることの背後には、キリスト教というものがあると思います。個人を大事にして、たとえ皆と切れた個人だとしても、個というものが神と繋がっている、あるいは他の人達も皆神と繋がっている、というふうな意味の繋がりがあのだと思います。そして、近代の自然科学というものも、そういう考え方をベースにして出てきたのではないかと思います。自然科学の根本にあるのは、まず科学者と彼が研究する現象、この間に非常に厳密な切断がある。これが自然科学の非常に大事なところ。私がいろいろ自然科学的な研究をしても、その研

究対象は私と関係なく起こっていることですので、例えばヨーロッパで考えだされたニュートンの力学は世界中のどこでも通用するというふうにできるわけです。だから、自然科学というものはどんどん進むし、自然科学をもとにして、今我々が生きているような便利な世界が出来てきたわけです。自然科学と技術というものをどんどん進ませたら、我々何でも出来るのではないかと考える人も出てくる。

私がここで申し上げたいのは、自然科学的、技術的な考え方があまりに極端になると、人間には心配が起これると思います。日本で今一つの大きな問題は、沢山の子供達が学校へ行かなくなるということです。子供が「学校へ行け」と言ってもなかなか行かずに家にいる。無理に行かそうとする

..... 主な内容

人間関係の文化差 5~9	世界の国からこんにちは 14~15
国際日本文化研究センター所長 河合隼雄	特別企画
優しかったペルーに	「大江戸助六太鼓」小林正道 16~17
ありがとうをもう一度 8~9	平成9年度総務庁青少年国際交流事業
SWYAA Tokyo Conference 10~13	参加青年募集開始 18~19

〈表紙の説明〉

タイ
作者名不明
「家族」
アジアのこども絵画展より
優秀賞受賞作品

と頭が痛くなったり、お腹が痛くなったりする。あるいは足がすくんで歩けない。そういう学校へ行かない子供が増えてきて、私のような心理療法の仕事をしている者のところへ連れて来られます。ある時、一人の男性が来られまして、その人の高校生の息子が3年間も学校へ行かない。その父親は息子を学校へ行かせるために、宗教家を訪ねたり、心理学者を訪ねたり、いろいろされたわけです。とうとう私のところへ来られました。

彼は私のところへ来るなり、「あなたは京都大学の教授でしょう。先生、考えて下さい。今、科学が非常に進んで、人間はボタンをちょっと操作するだけで、ちゃんと月に行って、月から帰ってくるすることができます。それができるのだから、私の息子を学校へ行かせるボタンはありませんか。」と言われました。つまりその人は何か上手な技術的な操作をパッ、パッとすると子供が学校へ行く方法があるに違いない、お前は京都大学の教授をしているくらいだから、そんなことは知っているだろう、とこういうことなのです。私はその時に言いました。「それはすぐできます。それは非常に簡単で、子供が寝ているあいだに体を縄で全部くくってください。そして、子供を担いで、学校へ持って行って放り込めばいい。」そうすると父親は「それは困ります。私の子供に学校へ行ってほしいのだ。子供が行ってほしい。」と。私がその時言ったのは「もし子供に自分の意志で行ってもらおうと思うかぎり、そんなボタンを操作することはできません」と。子供を縄で縛って担いで行くことはどういうことかという、子供を人間としてではなく、物にしたということです。つまり父親と子供になにも関係がないと考えると、

操作はできます。ところが、父親と子供に親と子の関係があるということを実際に考えだすと、我々は「操作」ということはできなくなります。つまり、そこで子供を自分の対象として、あるいはmaterialとして見るのではなくて、子供も生きた人間であるし、自分も生きた人間である、というふうに考えるかぎり、二人の関係を余程考えねばならない。その関係ということを考えるときに、我々はA型だけではなくてB型も入れこんで、両方考える必要があるのではないのでしょうか。

人間関係の復活

その一つの例として、こういうことを申し上げたいと思います。今日本の国では老人の方の問題も非常に深刻になっています。我々はそれを「老人ボケ」等と言っておりますが、歳を取った方が記憶が急激に薄れてしまったり、言葉も忘れてしまったりされる。それでその方に例えば息子がいても「あなたはどなたですか」というふうなことを言われたりする。それで息子も、父親はもう自分が誰かさえわからなくなった、わからないのだから仕方がない、というので病院へ入れるとかそういうことになってしまう。ところが皆がそういうふうにいる人に対して、私が先程Bパターンといったような人間関係を非常に深く持てる人が現れますと、言葉を失っていたと思う人が話を始めたり、あるいは記憶が戻ってきたりということがわかってきました。実はそういう仕事を我々はしています。例えば私が訓練した大学院の学生たちがそういう老人のところへ行きまして、その人に何か言って答えてもらおうというのでは

なくて、とにかく一緒にいるということが大切なのだ、二人が本当に包まれた気持ちでそこにいるということが大切なのだ、というふうにだんだん接していきますと、今までものと言わなかった方がものを言われる。あるいは記憶が薄れていたと思う人が記憶が返ってくる。これはどのように操作し、どのように薬を飲まずのか、というふうな考え方と全く違うと思います。

ある日本の老人ホームにおられる人達が、そこからもう一つ発想を進ませました。ボーとしてあまり何もできないような人と一緒にいると少しずつ話をされる。その時「あなたは今何がしたいですか」と聞く。そうするとその人は「私は自分の生まれたところにもう40年程行っていないのだけれど、死ぬまでに一遍あそこを訪ねてみたい」というふうなことを言われます。そのことをそこにおられる皆に伝えるのです。そうするとその養老院に入っている人の中には、まだ外に出て電車の切符を買ったりできる人がおられるわけですから、私が協力しようと申し出る人もいます。あるいは自分は一緒に外へ出て行けないけれども、あなたの旅費のために自分の持っているお金を少しは寄付しよう、という人も出てきて、何々さんを一度故郷へ行かせるための集まりというものができてきます。そういう集まりができると、今までこんなことはできないだろうと思っていた老人に相当元気が出てきて、結局それが成功していくのです。私はそれを聞いていて、非常におもしろく思いましたのは、これは先程私が言ったA型とB型が非常にうまく繋がっていると思うのです。どこにA型があるかと言うと、あなたの好きなことを一遍やってみませんか、というところはA型で

すね。今までの完全なB型だったら、もう自分はぼんやりして養老院にいるのだから、このまま皆他の人を動かさずにぼんやりして死にましよう、というのが日本の昔からのB型の考え方だと思います。ところがそこで「あなたのしたいことをやりましよう」というのはA型なのだけれども、あなたは何をしたいか、という話の前の根本に非言語的な一体感があるということです。この非言語的な一体感ということ抜きにして、老人に「あなたは何がしたいですか」と聞いても、おそらく、その人は話もされないだろうし、そういう元気も出てこないだろうと思います。だから、今ここに例を挙げましたように、私は一応二つに分けておりますが、これがどんなふうに繋がっていくか、どんなふうに活かされていくか、ということが私はこれからの根本ではないかと思えます。

文化の調和的共存

それぞれの文化というものは伝統を持っておりますので、なかなか簡単に変わるものではありません。だから、今私の話を聞いておられてもやっぱりこちらの方が良い、Aがいい、とかBがいいとか思われる方もいるかもしれません。ここでもっと理論的に考えだしますと、AとBというのは簡単に両立しにくい。だからこの二つを一つにしてCタイプというか、あるいはXパターンというのですか、そういうものが考えられるのではないかとか、出てくるのではないかと、というふうに言う人もおられます。私は実は非常に長い間、両者を統合するようなものはないかということはずっと考えてきました。しかしこの頃は、統合するとい

うふうには思わないほうが良いのではないだろうか、と思っています。あるいはできるはずがないと思っています。ただし、AとBは、統合はされなくても、私の心のなかで共存することはできる。あるいは調和的に共存することができる。調和的に共存することと統合というのは少し違うと私は思っております。統合というのは、何か中心があって、中心が完全に全体をコントロールしているというイメージを持つのですが、そういうふうな中心があって非常にコントロールされた第三の体系、在り方が出てくるのではなくて、AとBが調和的共存、あるいは時には葛藤的に共存。そのことによって何か新しいものが出てくるのではないか、というふうには私は今のところ考えております。皆さん方のように本当に自分の意志

で違う文化の人々と接する機会を持つようとしている人達は、私の考えを参考にしながら、将来の人間全体のため、何か新しい世界を切り開こうとしているのだというくらいの気持ちを持ってくださると有り難いと思います。何度も繰り返すようですが、自分の立場に立って、相手が間違っているとか、相手がおかしいということは非常に簡単です。

例えば皆さんの中でヨーロッパから来られた方が、日本人に何か聞くとなかなか自分の意見を言わない。直ぐに「はい、はい」と言ったり、I don't knowと言ったりする。そこで日本人はだめだ、日本人は個人というものをわかっていない、あるいは日本人は自分というものが確立していない、と言うのは非常に簡単です。そうではなくて、

著書紹介

1969年、第11回日本青年海外派遣団員として、ペルー、ブラジル、アルゼンチン、エクアドル、メキシコなどを訪問した宮澤美保子さんが、その体験を振り返り当時の旅行日記を一冊の本としてまとめ、出版しました。

「優しかったペルーに、ありがとうをもう一度」 〈海外派遣団員の日記〉

第11回日本青年海外派遣、中南米班団員
宮澤美保子

(まえがきより)

若い私が教えられた貴国に、ありがとうを再び言いたくて、また、色褪せた滞在日記記録の中から、国際援助などのあり方に少しでもお役に立てる部分が見い出せるならと、敢えてペン

をとりました。もし、この本の利益があるのなら、愛するペルーに捧げたくて……。

(本文より)

日本人の墓

10月7日 火曜日 晴れ

リマ市を離れて早1週間、今日は砂漠地帯に眠る2か所の日本人墓地を参拝し、ペルーと日本の合弁の魚粉向上を見学の後、リマに戻る日だった。

昨夜、夕食会を共にしたバランカ周辺の日系人の方々の何人かが、花や線香を携えて「日本から来て下さった皆さんと一緒に先祖の墓参りができるなんて夢のようです。本当にありがたいことです。」と、朝から集まって来られた。(中略)

そういう行き方の背後にどういう宗教があるのか、背後にどんな哲学があるのか。そしてそれはそれなりのおもしろいシステムを持っています。それを頭ではなくて、自分の体で感じとるということをされてこそ、他の文化に触れるということの意味があるのではないかと思います。これは日本人の方も全く同様です。他の国の方々と接しながら、自分自身を見つめる。その時に、我々日本人の場合よくあるのは、実はこう言っている私も若い時はそうでしたが、なんとなく欧米の考えが正しいと思ってしまうのです。自分は欧米の考えに早く慣れるようにしなくてはならないと単純に思い込んでしまう。そうではなくて、欧米の考え方もすごくおもしろくて意味があるけれども、自分が伝統的に持っている日本のものもおもしろくて意味

がある。その二つのものが心のなかで時に葛藤を起こしたり、時に調和したりする。これをゆっくりとやっつけていこう、というふうに思えばよいのではないかと思います。

以上で私の話は終わりますが、皆さんがせっかくのこういう機会をとらえられて、文化差のおもしろさを体験しながら、自分の生き方を考えていただければ、非常に幸いと思います。どうも有り難うございました。

(おわり)



パラモカから南へ数キロ、まず、パラモカにあるという日本人墓地へ、ガルシアの運転で例のように出発。荒涼とした砂の一角が広がる地域、素人目にも、さぞや農業は大変だろうと想像された。パラモカは、リマ市から北に 230 キロの地にあり、只今は 17 世帯の日系移住者がお暮しのこと。(中略)

この墓地には、明治 39 年 11 月 21 日「巖嶋丸」でペルーに渡り、この地に上陸の 100 名の日本人をはじめ、約 500 人の共同墓地だと説明された。F 団長をはじめ私達は、ペルー在住の日本人達の団結の強さとか、先祖を大切にすることを改めて知った。

〈ミニ・インフォメーション〉

「青年群像 '96」

「第 8 回世界青年の船」上岡団長 写真展開催!

船内・寄港地を問わずいつもカメラを抱えて写真を取りつづけていた上岡先生。いよいよ待望の写真展が来る 4 月 1 日から開催されます。

青年達の素顔に迫った作品に乞うご期待!

開催日：1997 年 4 月 1 日～14 日

(10:00～18:00 休日定休 最終日 16:00 迄)

会場：新宿ミノルタフォトスペース

(紀伊國屋書店隣 カワセビル 3F)
TEL 03-3356-6281

SWYAA Tokyo Conference 1997 開催!



◀ 総務庁青少年対策本部
中川次長への表敬訪問
なごやかなひととき

去る1月16日～21日まで、「世界青年の船」同窓会ネットワーク会議(SWYAA Network)が東京にて開催されました。これは昨年の東側航路に引き続いて開催されたもので、西側航路より第4・6・8回から17名の代表者が来日し、日本を含めて18か国で会議を行いました。総務庁青少年対策本部及び日本青年国際交流機構の代表者も含めて25名のメンバーで、森田正英 IYEO 副会長の議長のもとに、活発な意見交換がなされました。

初日は、各国からの報告を聞き、世界船終了後の国内での活動について情報交換を行いました。2日目は昨年東側代表者が作成した同窓会設立に関する同意書について激論が交わされ、結果的に西側も、修正を加えた同意書に全員署名し、ここに西側航路においてもSWYAAの設立が確立した形式となりました。

その後、来年迎える「世界青年の船」第10回

を記念する事業についても、各代表者から写真展や出版物の発行等、様々なプロジェクト案が発表され、これは寄港地リユニオン開催地が決定した後、具体的に内容を詰めていくことになりました。

この代表者会議と平行して、1月18日には日本青年も「大同窓会」を実施。今年は土曜日開催ということもあって、第I部・II部編成をとり、I部は、晴海客船ターミナル内ホールで、日本青年の縦のつながりについての意見交換が、趣向を凝らしたイベント形式で行われました。

II部では、各国代表者のウェルカム・パーティーを兼ねた「にっぽん丸」での船上パーティーが行われ、出席者総勢200名を越す大盛況ぶり。各回の団長・管理官・船長を始め、船を下りてから8年が経つ第1回生からまだまだ熱い第8回生まで、全参加回生が集まったことは、実行委員の事前のPR活動に費やした努力の賜物と言えるでしょう。



▲ 熱心な討議で、時間の延長もいとわずに

その後代表者会議では、第9回のNLとの懇親会が和やかに行われ、各代表がこれから出航するNLたちにエールを送りました。一瞬ではありますが、世界船上で“East meets West”が実現したことは、感慨深いものがありました。

代表者会議は、早朝およびミッドナイト会議も加わり、会議時間は予定よりもかなりオーバーしましたが、その分、この限られた時間でより多くのことを討議したいという各国代表者の熱意が感じられました。

今回の代表者会議、そして18日の「大同窓会」の成功を見て、世界船のネットワークが少しずつ動きはじめている実感を持ちました。



▲ 最後の会議で、笑顔のほっとした表情

会議の中では、今後最も期待できる通信手段として、コンピュータネットワークの話題で盛り上がりました。具体的な可能性としては、第10回記念事業の一貫として、寄港地リユニオン会場と各国をコンピュータで結んだ“tele-conference”や“Virtual Cruise”についても紹介されました。

現在参加国50か国以上、参加青年数2,500名以上を数えるまでになった「世界青年の船ネットワーク」。

ようやく第一歩を踏み出したこれからの展開に
乞うご期待!

日本青年国際交流機構事務局次長
椿 景子

▼ 最高に楽しみの場



▶ 「第9回世界青年の船」の
渡辺船長よりごあいさつを
いただく





▲ 第1部のグループミーティングの様子

1996年7月末。IYEOより一通の手紙がきた。世界船も今度の出航者を含めて9回を数える。同窓会組織について討議したいので、第3回の代表として参加してもらえないか、という内容のものであった。そのときは、社会人になって6年目で、人間関係が会社の人だけに限られてきていたので、なにか新しいことを始めようと模索しているときだった。また、以前に課題別研修のお手伝いをさせていただいたときに、その経験が大変有意義だったので、なにか新しいことが自分の中ではじまるのではないかとわくわくして参加させていただくことにした。

会議の当初は、受け身でIYEOが用意してくれたものに対してのみ、意見を言えばよいのだろうと思っていた。しかし、私用で忙しく日程があわないのでミーティングに参加できないでいたら、私のような人が多いようで、会議の参加者数が減っていると、同じ3回の小林さんから聞いた。同窓会を今年の世界船の出航前日にやるかどうかの決をとることにしたが、回答率が悪く、行わないこ

とになっていた。このような状態であることを小林さんに問い合わせた結果知り、これはなんとかしないといけないということで第4回のミーティングに参加してから、同窓会開催に向けての忙しい毎日を過ごすこととなった。

このように受け身で始めたこのボランティア活動も、能動的に参加すると得るものが多いものであった。

まず、自分が意外と会社勤めにより、組織運営について学んでいることを知ることができた。学生時代の自分と比べて、会議を企画するにはどうしたらよいか、運営するにはどのようにすればよい

「世界青年の船 スタッフと

か、といったことが身につけていたことがわかった。

2つ目にボランティア活動は楽しくないといけないのだ、ということがわかった。仕事の場合、効率性が優先するため、参加している個人が楽しいか、やりがいがあるか、ということは度外視される。(できれば、楽しいに越したことはないが)ボランティアは強制して参加させることは出来ないのだから、仕事以上に、参加する個人にとって魅力あるものでなければならない。そのため、全員がある程度納得するまで話し合う必要があり、時間が掛かるのは仕方がないことというのがわかった。しかし、これはボランティア活動に限ったことではないので、自分の仕事のスタイルに活用で

きることであった。

3つ目として、会社と自宅の往復では知り合うことのできない人たちと仲良くなれたことがあげられる。これは、同じ活動にかつて参加した人とも、「私の頃はどうかだった」といった話ですぐに打ち解けてしまえることもあげられる。

4つ目として、会社ではチャレンジさせてもらえないことに挑戦できることがあげられる。会社では、オーガナイズする立場を女性はなかなか経験することができない。ボランティア活動では自分のやる気があればやらしてもらえるので、自分の能力に自信を持てるようになった。

「リユニオン」 しての活動

以前、ボランティア活動をしている人がどうしてこういった活動をしているのか、と尋ねられ、「学ぶことが多いから」といっていたが、私自身も与えるというより得ることが多いと実感した。同窓会の実行委員になったために、習っていたスペイン語は授業にでられなくなり、落第してしまった。けれども、私は後悔していない。

なぜ、同窓会組織が必要なのか？ それは、「世界青年の船」のプログラムによって得たことの多い私たちは、多くの人がこの素晴らしいプログラムに参加で

きるようにしたいし、得たことを忘れないようにして、心のふるさととしたいからでないだろうか。

私はこの活動をもう少し続けて行きたいと思っている。次の人たちが引き継げるようになるまで続ける必要を感じているからだ。他の人たちにも、この活動を勧めたい。得るものが多いからだ。

「世界青年の船」のネットワーク作りはいま、立ち上がったばかりである。立ち上がるには、さまざまな人たちの努力があってここまで来たことを知った。そして、私にこの活動に参加するチャンスを与えてくれたすべての方々に感謝したい。

「世界青年の船」第3回参加青年
辻 麻由子



▼ 第Ⅱ部、なつかしの「にっぽん丸」で楽しいひととき



第10回青少年国際理解セミナー



▲ ドミニカ共和国へご案内します！



▲ 元気印の韓国団!!

「世界の国からこんにちは!」★私たちの行った国ってこんな国!★

～総務庁青少年国際交流事業（航空機による青年海外派遣）報告会～

平成9年1月26日（日）、東京の国立オリンピック記念青少年総合センターで、平成8年度総務庁青少年国際交流事業より、「国際青年育成交流事業」、「日・中青年親善交流事業」、「日・韓青年親善交流事業」の帰国報告会を行いました。

平成8年度参加青年、141名中約70名が再び東京に集まり、旧交を温めるとともに、一般の方々に派遣国の事情を理解してもらうべく、報告会に臨みました。

午後12:00開場。10か国の展示ブースが会場のところ狭しと並び、団員は民族衣装を着てお客様をお出迎え。関係者に加え、一般の方々を含め150名近い参加者は、まるで日曜日の半日の間に世界各地を旅した気持ちになったようでした。

○実行委員会

この報告会を開催するにあたって、昨年11月の末から4回に渡り実行委員会を開いて、準備を

進めました。

「なぜ、報告会を開くのか」「一般の方も自分自身も楽しめる報告会を創り上げるためにはどうしたらよいか」などを時間をかけて話合いました。

○プログラム

今回の報告会のプログラムは、5か国ずつ、2回に分けたグループミーティングを中心としてその前後にアピールタイムと懇談会を入れるという3本柱で構成しました。



▲ 最後の準備を、皆で和気藹々と

〈展示ブース及びグループミーティング〉

各団とも、派遣期間中に手に入れた様々な品物、写真、地図、民族衣装などを並べ、派遣国の様子が目で楽しめるような展示ブースを設けました。それを囲んで民族衣装を身につけた団員が派遣国の事情や自らが得た様々な体験を話しました。

〈アピールタイム〉

5団が同時にグループミーティングを行うのですから、他の団にお客様をとられてしまっは大変です。そのため、多くの人に自分の派遣国のよさを分かってもらおうと、3分間（時間制限付き）のアピールタイムを設けました。

ツアーコーディネーターを装い自分の派遣国に、会場にいらした方々全員を派遣国へ招待した団、民族衣装を着てダウンタウンの日常を再現した団、派手めのアクションを交えて自分達の経験を語る団など様々な趣向をこらした演出が見られました。



▼「インドネシアは、素敵な国でした」



聞けば、前日に団員と再会した後、夜も寝ずに皆で考えたとのこと。派遣期間当時のチームワークは相当強いものだったようです。

〈懇談会〉

懇談会は、展示ブースの前に座ってはいは表現できないダンスやゲームを行い、参加者全員が楽しめる機会を創りたいという趣旨で行われました。最後は解団式と同じく、アメリカ団と「マカレナ」を踊って無事に全てのプログラムを終了しました。

これからも、様々な機会を利用して、国際交流事業を通じて得た友情や貴重な体験をどんどん生かしていきましょう。

最後になりましたが、実行委員の皆さんお疲れさまでした！

日本青年国際交流機構国際担当幹事
（助青少年国際交流推進センター職員）
赤澤 美雪

〈一般参加者アンケートから〉

- 名前しか聞いたことのない国のことを写真を見たり、話を聞いたりできて面白かった。
- 肌で感じたことを話し合える仲間がこんなにいる、とても素晴らしいですね。
- もっと長時間、いろいろな話が聞きたかったです。

特別企画 「この人に聞きました」



▲ マネージャーでもある奥様のゆりさんと二人三脚で

Q：どのようなことを期待して「青年の船」の参加青年たちに和太鼓を指導されるのですか。

A：「大江戸助六太鼓」と「青年の船」との関係は、「第12回東南アジア青年の船」から始まっているのだけれど、その時から僕は、このような国家事業に参加する彼らを日本を代表する「大使」だと思っている。日本文化を知らない若者が多い中、例え短期間でも和太鼓を習って、それを世界にアピールすることは素晴らしいことだね。和太鼓というと一見単純で簡単そうに見えるようだけれど、「ドンッカッ」という単純な音だからこそ、奥が深くて難しい。普通「ドンッ」という音を出すだけでも数か月かかるし、人前で演奏できるようになるには数年かかるもの。それを2か月で仕上げなければならないのは、正直きついね。でも、この経験を通じて青年自身が日本の文化を知り、世界の青年と交流ができるというのは意義あることだと思う。

和太鼓の音に 心をのせて…

大江戸助六太鼓 助六流宗家
小林 正道

Q：宗家ご自身も海外公演に出掛けられますが、日本と海外での観客の反応に違いはありますか。

A：ヨーロッパで演奏するときに明らかに違うなど感じるのは、「和太鼓」を一つの芸術としてとらえているところ。まるで、オーケストラを聴くような雰囲気がある。特に大江戸助六太鼓の場合、音楽性・芸術性・スポーツ性を持ち合わせた演奏だから、見て聴いて楽しむパフォーマンスというとらえ方があるような気がする。日本での場合は、「和太鼓＝お囃子」というイメージが先行するから、どうしても「お祭り」になる傾向がある。どちらもそれぞれ良いところがあるわけで。ただ最初の頃のヨーロッパ公演では、いま一つ観客のノリがわからず焦ったことはあったね。

Q：1996年は宗家の芸道40周年という記念すべき年だったわけですが、和太鼓一筋に40年という時間を振り返られて感じたことは？

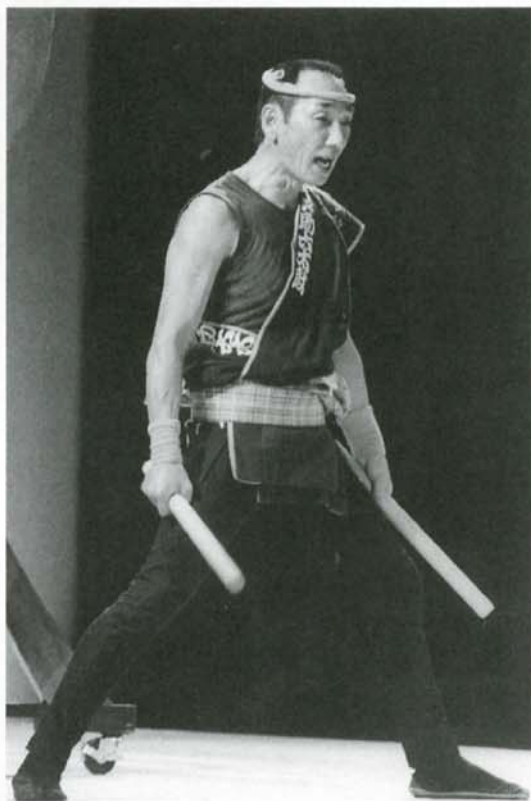
A：40周年祝賀会を始め、いろいろな場面で、40年という時間の重みについて聞かれることがあ

ただ、「気がついたら40年」というのが正直なところ。僕自身の中に、「止まりがあってはダメ」という気持ちがあって、大江戸助六太鼓にしても、常に発展し続ける和太鼓でありたいと思っている。止まってしまったら保存会になってしまうからね。

大江戸助六太鼓の特徴は、何とんでも「粋・ビート感」。だからこそ、その時代の音や新しいものを取り入れていこうと思っている。伝統+創造で常に前進し続けたい。

Q：今後の展望とこれから和太鼓を学びにくる青年たちへのメッセージを

A：今後の展望としては、やはり日本だけでなく多くの国の人たちに日本の和太鼓の素晴らしさを伝えていきたいね。そして大江戸助六太鼓の精神をも広く伝授していきたいと思う。つまり、「和太鼓を通じて心を学んでいく」ということ。「心・ハート」と一言で言っても、僕はこの言葉にいろんな意味を込めていて、この中には感謝すること、思いやりを持ち合うことなど基本的なマナーを意識したい。例えば、みんなが使っている1尺5寸（直径約45cm）の和太鼓を作るには、幹の太さが一回り以上太い木を使う。これは、何百年も前に先祖が植えた木を使うわけで、そこから感謝の念が湧いてくる。門下生が道場を利用する中でも、自然に思いやりが生まれてく



るような人間関係を築いていきたいね。

青年の船のメンバーとはどうしても短期間のつきあいしかできないから、なかなか大江戸助六太鼓の本質まで触れる機会がないけれど、短い時間

で学んだ曲を船内で演奏して、それがきっかけでいい交流ができたという報告を受けると本当に嬉しい。

ただ、10年以上も継続してくると、習いにくる青年の中に「やらなければいけない意識」という義務感や「和太鼓はウケる」という気持ちが先行しかねない。せっかく和太鼓を学ぶ機会があるのだから、日本文化を少しでも伝えたいという意識で取り組んでもらいたいと思う。

これからも参加する青年の皆さんには日本の「大使」として頑張っていってほしいと思うし、心から応援しています。

小林正道氏のプロフィール

小林正道（こばやし せいどう）

1944年1月6日生 A型 東京出身
東京は本郷の屋号「助六製麺」を営む小林家に生まれる。1956年（12歳）に盆太鼓を打ち始め、15歳で湯島天神盆太鼓コンクール優勝。同年「大江戸助六太鼓」を結成。1960年に「助六流打法」を創立。その後、マスコミを始めとする数々のイベントや、海外公演等をこなしている。同時に、太鼓の技と心の後進たちへの伝達・指導も積極的に行っており、現在は200人もの門下生を抱える。「青年の船」への指導は1985年から続いている。

平成9年度総務庁青少年国際交流事業参加青年募集開始

総務庁青少年対策本部 TEL 03-3580-5365

〒100 東京都千代田区霞が関3-1-1

総務庁の行う青少年国際交流事業は、日本と世界各国の青年の交流を通し、相互の友好と理解を深め、広い国際的視野と国際協力の精神を養うの機会を提供しています。これにより、国際化の進む社会の各分野で活躍できる青年の育成を目指します。各事業参加者は、帰国後には日本青年国際交流機構（事後活動団体）に入会して、総務庁事業への協力を含め各種国際交流活動を行うことを基本としています。

		航空機による青年海外派遣									世界青年の船		東南アジア青年の船	
訪問国等		方洲	ドミニカ共和国	カザ	ドク	インドネシア	ソルダ	ネーデル	カンボ	中国	韓国	インドネシア、マレーシア、フィリピン、タイ、シンガポール	ASEAN7カ国の青年約315人と共に船内で共同生活を送りながら各国を訪問	
実施時期 (期間)	平成9年9月～10月									平成10年1月～3月		平成9年9月～11月		
	約25日間					約20日間		約15日間		約65日間		約60日間		
募集人員	各約8人					一般団員 約15人		一般団員 約35人		約100人		45人		
資格要件	年齢	20歳～30歳 (昭和41年4月2日～昭和52年4月1日に出生)					一般団員：20歳～29歳 (昭和42年4月2日～昭和52年4月1日に出生)		20歳～29歳 (昭和42年4月2日～昭和52年4月1日に出生)		18歳～30歳 (昭和41年4月2日～昭和54年4月1日に出生)			
	青少年活動等	帰国後もその経験をいかして国際交流活動、青少年活動等を活発に行える者												
	語学力	交流活動を円滑に行える英語力を有すること。					訪問国の公用語による簡単な日常会話能力があれば望ましい。		交流活動を円滑に行える英語力を有すること。					
その他	国の行う同種の事業に参加したことのある者は応募できません。													
研修	事前	7月中旬の約5日間（於：全事業とも東京）					8月下旬の約5日間		7月中旬の約5日間					
	出発前	出発直前の約2日間（於：全事業とも東京）					出航直前の約3日間		出航直前の約2日間					
	帰国後	帰国直後の約2日間（於：全事業とも東京）					帰国直後の約2日間		日本国内活動直後の約2日間					
個人負担額	約7万円					約27万円		約20万円						
〔内訳〕 研修費（事前、出発前、帰国後）、船内供食費（船事業のみ）、渡航手続費用、旅行保険料等（上京・帰郷旅費は、別途負担となります。）														
※ 航空機による青年海外派遣のうち、中国、韓国派遣については、一般団員とは別に、渉外団員各2人（おおむね25～35歳。訪問国の公用語（中国語又は韓国語）に堪能な者）も募集しています。渉外団員は、参加経験を問いません。														

平成9年度事業日本参加青年募集担当都道府県主管課一覧

都道府県	主管課名	電話番号	募集期間	中間選考日
1 北海道	総務部知事室国際交流課	011-231-4111 (内21-216)	3/5 ~ 4/4	4/24
2 青森県	生活福祉部青少年女性課	0177-22-1111 (内2218)	3/10 ~ 4/10	4/25
3 岩手県	企画調整部青少年女性課	0196-51-3111 (内2352)	3/1 ~ 4/21	5/7
4 宮城県	環境生活部青少年課	022-211-2559 (直通)	4/1 ~ 4/21	5/7
5 秋田県	生活環境部青少年女性課	0188-60-1552 (直通)	3/10 ~ 4/11	4/24
6 山形県	文化環境部県民生活女性課	0236-30-2101 (直通)	3/10 ~ 4/11	4/25
7 福島県	生活環境部青少年女性課	0245-21-7187 (直通)	3/10 ~ 4/18	5/2
8 茨城県	福祉部女性青少年課	029-221-8111 (内2744)	3/10 ~ 4/10	4/25
9 栃木県	県民生活部婦人青少年課	028-623-3075 (直通)	3/10 ~ 4/11	5/7
10 群馬県	教育委員会事務局青少年課	0272-23-1111 (内4143)	3/10 ~ 4/9	4/18
11 埼玉県	県民部青少年課	048-830-2912 (直通)	3/21 ~ 4/3	4/21
12 千葉県	社会部青少年女性課	043-223-2396 (直通)	3/10 ~ 4/4	4/23
13 東京都	教育庁生涯学習部社会教育課	03-5321-1111 (内54-442)	3/1 ~ 3/21 (郵送) 3/24 ~ 3/25 (窓口)	4/6 4/6
14 神奈川県	県民部青少年室	045-201-1111 (内3477)	3/10 ~ 3/28	4/29
15 新潟県	福祉保健部児童家庭課	025-285-5511 (内2511~3)	3/10 ~ 4/7	4/23
16 山梨県	企画県民局青少年女性課	0552-23-1357 (直通)	3/14 ~ 4/14	4/25
17 長野県	社会部青少年家庭課	026-235-7130 (直通)	3/4 ~ 4/4	4/18
18 静岡県	教育委員会事務局青少年課	054-221-3312 (直通)	3/13 ~ 4/14	4/23
19 富山県	生活環境部女性青少年課	0764-44-3138 (直通)	3/7 ~ 4/7	4/28
20 石川県	県民生活局女性青少年課	0762-23-9111 (直通)	3/18 ~ 4/18	4/25
21 福井県	県民生活部青少年女性課	0776-21-1111 (内2362)	4/1 ~ 4/20	4/25
22 愛知県	総務部青少年女性室	052-961-2111 (内2354)	3/10 ~ 4/15	4/16~4/18
23 三重県	生活文化部青少年女性課	0592-24-2404 (直通)	3/12 ~ 4/11	4/23
24 岐阜県	総務部青少年国際課	058-272-0810 (直通)	3/3 ~ 4/15	4/25
25 滋賀県	教育委員会事務局生涯学習課青少年対策室	0775-28-4661 (直通)	3/10 ~ 4/10	4/20
26 京都府	府民労働部青少年課	075-414-4306 (直通)	3/21 ~ 4/11	4/25
27 大阪府	生活文化部青少年課	06-941-0351 (内4844)	3/3 ~ 4/4	4/18
28 兵庫県	働兵庫県青少年本部青少年交流担当	078-360-8581 (直通)	3/14 ~ 4/11	4/27
29 奈良県	生活環境部青少年課	0742-22-1101 (内3345)	3/1 ~ 3/31	4/16
30 和歌山県	生活文化部青少年課	0734-41-2503 (直通)	3/3 ~ 4/11	4/27
31 鳥取県	企画部青少年女性課	0857-26-7076 (直通)	3/14 ~ 4/18	書類選考のみ
32 島根県	健康福祉部青少年家庭課	0852-22-6255 (直通)	3/5 ~ 4/10	4/23
33 岡山県	企画部女性青少年対策室青少年課	086-224-2111 (内2543)	3/11 ~ 4/10	4/23
34 広島県	県民生活部青少年女性課	082-228-2111 (内2937)	3/1 ~ 4/11	4/24
35 山口県	環境生活部女性青少年課	0839-33-2634 (直通)	3/12 ~ 4/11	4/24
36 徳島県	企画調整部青少年女性室	0886-21-2175 (直通)	3/17 ~ 4/18	4/27
37 香川県	生活環境部青少年女性課	0878-31-1111 (内2434)	3/5 ~ 4/21	5/10
38 愛媛県	県民福祉部児童福祉課	089-941-2111 (内2528)	3/1 ~ 4/5	4/23~4/25
39 高知県	文化環境部国際交流課	0888-23-9605 (直通)	3/11 ~ 4/15	4/25
40 福岡県	企画振興部県民生活局青少年対策課	092-641-4740 (直通)	3/10 ~ 4/11	4/23
41 佐賀県	福祉生活部児童青少年課	0952-25-7055 (直通)	3/10 ~ 4/14	4/25
42 長崎県	教育庁生涯学習課	0958-24-1111 (内3366)	3/15 ~ 4/15	4/24
43 熊本県	福祉生活部県民生活総室	096-383-1111 (内3797)	4/1 ~ 4/15	4/25
44 大分県	福祉生活部女性青少年課	0975-36-1111 (内2734)	3/10 ~ 4/14	4/25
45 宮崎県	企画調整部女性青少年課	0985-26-7041 (直通)	3/1 ~ 4/18	5/1
46 鹿児島県	県民福祉部青少年女性課	099-286-2557 (直通)	3/1 ~ 4/5	4/23
47 沖縄県	生活福祉部青少年・交通安全課	098-866-2182~84 (直通)	3/15 ~ 4/15	5/7

* 都道府県レベルでの試験方法、手続きは異なりますので、受験該当地で確認して下さい。

第11回青少年国際理解セミナー

「第23回東南アジア青年の船」帰国報告会

平成8年度の「第23回東南アジア青年の船」参加青年による帰国報告会が下記の日程で行われます。総務庁青少年国際交流事業について知りたいと思っている友人知人の方々に、ぜひ知らせてあげてください。平成9年度の募集についての情報コーナーも設けています。事業に応募しようとしている方にとっては選考試験の情報収集のためにも見逃せないチャンス。

日 時：1997年3月9日(日) 12:30～16:30

会 場：国立オリンピック記念青少年総合センター 国際交流館第1ミーティングルーム

参加費：無 料

主な内容：アセアン各国での活動を撮影した写真や団員が持ち帰った品々の展示、ビデオ上映、事業体験談発表、グループ別懇談等のプログラムに各国のお茶などを楽しみながら参加していただきます。

申込み：(財)青少年国際交流推進センターの「セミナー係」まで電話、FAX又は葉書にてお申込み下さい。宛先は、下欄の(財)青少年国際交流推進センター事務局へ。

平成9年度は、福島にて全国大会！

平成9年度の日本青年国際交流機構第13回全国大会は、11月29日(土)、11月30日(日)に福島県で開催されることに決定しました。九州での全国大会の後には、一気に飛んで東北は「福島県」で北の国ならではの大会を楽しみましょう！東北の若手メンバーの頑張りを期待してますよ！

編集後記

なんとと言っても、新春最大のビックイベントは、「世界青年の船リユニオン」の第1回から第8回までの大集合でした。実行委員の苦労は並大抵ではありませんでしたが、きっと多くのメンバーが感謝の気持ちで一杯だと思います。多くの人が協力しあうことは大変ですが、得るものも大きいですね。

*本誌の年間講読をご希望の方は、(財)青少年国際交流推進センターまで葉書又はFAXにてお申込み下さい。年間講読料は1,500円です。

MACROCOSM(マクロコズム) 3月号 Vol.15 1997年3月1日発行(隔月発行)

編 集：マクロコズム編集委員会

発 行：財団法人 青少年国際交流推進センター

〒103 東京都中央区日本橋人形町2-35-14

TEL 03-3249-0767

FAX 03-3639-2436

e-mail LDP04056@niftyserve.or.jp

編集協力：総務庁青少年対策本部

日本青年国際交流機構

定 価：195円(本体189円)

印刷所：株式会社 絢文社

TEL 03-3959-3960

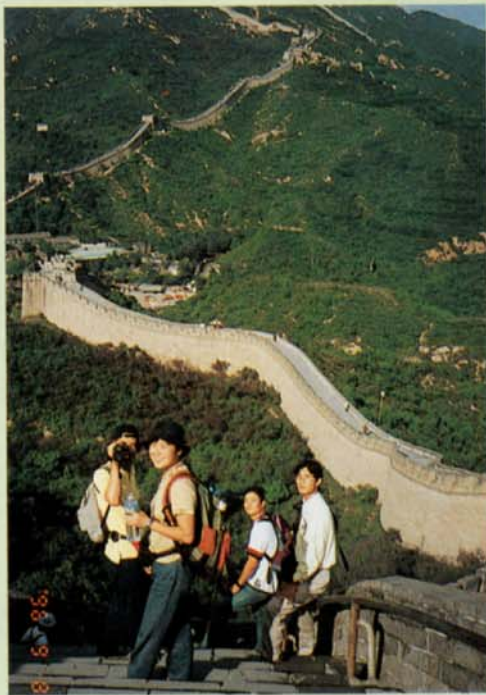
第18回日本・中国青年親善交流（派遣）

日中平和条約の締結を記念し、日本と中国両国政府の共同事業として昭和54年度に開始された事業で、二国間交流事業として我が国の青年約20名を中国に派遣するとともに中国の青年約30名を我が国に招へいしています。

第18回は、小山団長を始めとする代表団が、表敬、施設見学、ホームステイなどのプログラムを9月7日から9月25日の日程で体験しました。



▲ 中華全国青年連合会の劉鵬主席と会見する小山団長と平副団長



◀ 中国の象徴、万里の長城に感激！



▲ 青海湖の畔で全員そろって

▼ 青海省の土族の村で大歓迎を受ける



▼ どこでも子供は好奇心がいっぱい！



京劇のスターと記念写真
目線はなぜか隣のスターの顔へ



第10回日本・韓国青年親善交流（派遣）

1996. 9. 4 ~ 9. 18

昭和59年の日本・韓国共同声明及び昭和60年の日韓国交正常化20周年を踏まえ、日本と韓国両国政府の共同事業として昭和62年に開始された事業で、二国間交流事業として我が国の青年約40名を韓国に派遣するとともに韓国の青年約40名を我が国に招へいしています。

第10回は、小久保団長を始めとする代表団が、表敬、施設見学、ホームステイなどのプログラムを15日間の日程で体験しました。



▲ ソウル市庁舎玄関前にて全員集合。日本代表団総勢40名！

▶ 慶州の陶磁器工場を見学



▲ 民族博物館前で知り合った子供たちと遊ぶ

世界ジャンボリーの会場を訪問
▼ ボーイスカウトの活動を韓国で学ぶ



◀ 慶州ナザレ園にて
▼ 毎年の訪問で、お馴染みに



◀ ホストファミリーとの
忘れえぬ一時

